中学１年生から見た小学校外国語活動

岡崎　浩幸・西田　幸江

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究
第７号　通巻29号 抜刷　　平成25年１月

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 №7：47－55

中学１年生から見た小学校外国語活動

岡崎　浩幸・西田　幸江*

Junior High School First-Year Students' Perceptions about Elementary School Foreign Language Activities

Hiroyuki OKAZAKI, Yukie SAIDA

キーワード：小学校外国語活動，中学１年生の認識，中学校英語学習
Keywords：elementary school foreign language activities, junior high first-year students' perceptions, English learning in junior high school

Ⅰ　はじめに

３年前に実施された旺文社の調査「小学校の英語活動に関するアンケート」(2009年１月）によれば，小学校英語活動（外国語活動）には「課題があり，導入に不安が残る」と回答した小学校は52.5%であった。この報告から分かるように，導入のための準備が十分でないことが明らかであったが昨年度（2011年度），小学５，６年生を対象に外国語活動が必修化された。既に１年が経過した。T県では移行期間であった2010年度から，外国語活動を全小学校で導入していたため，今年度入学の中学１年生は，小学校５，６年時に外国語活動を２年間経験してきたことになる。さらに，文部科学省が外国語活動の目標を具現化して作成した『英語ノート１・２』(2008)を２年間使用してきた。

中学１年生の視点から外国語活動を振り返り，今後の改善に何が必要なのかを調査し探求することは極めて重要なことであろう。本研究は小学校教員，中学校英語教員にとって以下の点で意義があると考える。

小学校教員にとっては，児童の視点からの改善点や支援方法などが見えてきて，今後の指導に不可欠な情報となるであろう。中学校英語教員にとっては，「中学校の指導計画を作成の時には，地域の小学校における外国語活動の指導において，どの程度の素地が養われているのかを十分に把握すること」と中学校指導要領解説（文部科学省，2008）に明記されているように，小学校での生徒たちの体験や思い，意欲を知ることで，中学校で継続すべきことや今後の指導についての留意点を得ることができる。また中学校英語指導にこれまでとは異なる視点や配慮を組み込んでいくこともできると考える。

本稿が，今後さらに検討・整備が必要となる小学校及び中学校英語教育発展の一助となれば幸いである。

Ⅱ　調査目的

本研究は次の２つの目的で行った。一つは外国語活動を２年間（70時間）体験してきた中学１年生がその経験をどのように捉えているのかを明らかにすることである。二つ目はその経験が現在の中学校英語授業への取り組みや学習にどのような影響を与えているのかを調査することである。

研究課題として「中学１年生が外国語活動の体験をどのように捉えているか」と「小学校外国語活動の経験が中学校英語学習にどのような影響があるのか」の２つを設定する。それぞれを解明するための具体的な研究課題を以下に示す。２つめの「中学校英語学習への影響」は中学校英語授業をどのように捉えているのかを明らかにすることで,中学校英語学習に及ぼす影響を探究したい。

1. 中学１年生が外国語活動をどのように捉えているか。
   - 1.1 外国語活動を楽しんでいたのか。
   - 1.2 外国語活動の楽しさの要因は何か。
   - 1.3 外国語活動を楽しめなかった要因は何か。
   - 1.4 外国語活動で体験したことが中学校英語授業で役立っていると感じているのか。
   - 1.5 外国語活動の体験が中学校英語授業のどのような場面で役立っていると感じているのか。
   - 1.6 小学校外国語活動で望んでいたことは何か。
   - 1.7 小学校外国語活動で難しさを感じていたことは何か。
2. 外国語活動の経験が中学校英語学習にどのような影響を与えているのか。
   - 2.1 中学英語授業を楽しいと感じているのか。
   - 2.2 楽しいと感じる要因は何か。
   - 2.3 楽しいと感じられない要因は何か。
   - 2.4 中学英語学習で難しさを感じていることは何か。

* 射水市立大門中学

2.5 中学英語教科書の内容をどの程度理解しているか。

Ⅲ　研究方法

アンケートを用い中学１年生を対象に，２年間体験してきた外国語活動と中学１年の英語学習（６月時点）をどのように捉えているのか調査した。

１　調査協力者

2012年（平成24年）６月に，Ｚ市の７中学校の中学１年生を対象にアンケート調査を実施した。著しい回答ミスがなかった899名を分析の対象とした。表１は各中学校の中学１年対象人数と生徒の出身小学校数を示している。Z市には15校の小学校があり，全小学校で５，６年時に週１時間外国語活動を計70時間実施してきた。授業形態は，担任とALT，あるいは担任とJTE（日本人英語講師）のいずれかであり，教材には『英語ノート１・２』（文部科学省，2009）を主に使用していた。

表１　アンケート対象者内訳

中学校	１年人数	主な出身小学校数
A	246	５校
B	242	４校
C	123	３校
D	121	３校
E	71	５校
F	59	１校
G	37	１校
計	899	15校

２　アンケート内容

上述の研究課題を解明するために，12個のアンケート項目を設定し，以下に示した（詳細はAPPENDIX参照）。自由記述回答を多く用いたのは，生徒の体験からの生の声をできるだけ多く回収・分析し，今後の改善に活用したいという趣旨からである。

1 外国語活動に対する満足度（５件法）
2 満足要因（自由記述）
3 不満足要因（自由記述）
4 外国語活動の有用感（５件法）
5 外国語活動の有用感を感じる場面（複数選択可）：大城，横山（2008）を筆者が一部修正して用いた。
6 外国語活動への要望（自由記述）
7 外国語活動の困難さ（自由記述）
8 中学英語授業に対する満足度（５件法）
9 満足要因（自由記述）
10 不満足要因（自由記述）
11 中学英語学習の困難さ（自由記述）
12 中学英語教科書内容の理解度（５件法）

３　分析方法

５件法の項目については，平均値，標準偏差，平均との差，百分率を算出し分析を行った。

自由記述方式の回答は内容分析しカテゴリー化した。筆者２名で回答文中のキーワードや重要要素を基にカテゴリーを作成した。各カテゴリーに該当する度数を調査した。１文に２つの要素が含まれている場合は両方のカテゴリーに分類した。例えば，「単語のつづりを書きたかった」の場合，「単語」「書くこと」のカテゴリーにそれぞれに分類した。

Ⅳ　結果・考察

上述の研究課題に沿って，結果を検討していくことにする。

1.1 外国語活動の満足度（楽しさ）

図１から分かるように，「５大変楽しかった」「４楽しかった」を合わせて61%，さらに「３ときどき楽しかった」を含めると80%の生徒が小学校での外国語活動は楽しかったと回答している。

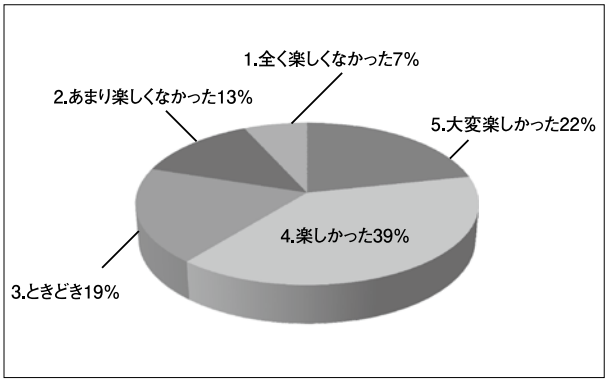

図１　外国語活動の満足度（楽しさ）

まだ導入されて２年，わずか70時間の外国語活動の体験を考慮すると，８割の生徒（児童）がある程度楽しいと感じているのはかなり高い数値であると考えられる。また，Benesse教育研究開発センター(2011)の調査では外国語活動が「好き」だったと回答した中学１年生は62.9%，一方「嫌い」だったと回答した生徒36.2%であった。この数値と比較すると，本調査の20%（1.7%と2.13%の計）はかなり低い数値であろう。

表２から分かるように，学校によって平均値にかなり大きな差が出ている（±0.71）。特に，D校は平均との差が－0.58でF校は＋0.71の差がある。出身小学校による指導の違いからこの差が生じた可能性が考えられる。F校の出身校は１校のみで標準偏差も他校より低くなっている。児童の満足度がかなり高いので生徒が楽しいと感じる活動のために準備や指導の工夫を凝らすなど，指導が行き届いていたのではないかと推測される。

表２　外国語活動満足度の記述統計

中学校	平均	標準偏差	平均との差
A	3.22	1.23	-0.34
B	3.85	1.03	0.29
C	3.71	1.05	0.15
D	2.98	1.23	-0.58
E	3.72	1.06	0.16
F	4.27	0.72	0.71
G	3.84	1.00	0.28
全校計	3.56	1.16	

1.2 外国語活動に対する満足要因

外国語活動に対して満足（５，４，３を選択）を表明している生徒は719名で，満足の理由を記述した生徒数は691名（回答率96.1％）であった。カテゴリーの内訳は表３の通りである。予想通り，上位には「ゲーム」「会話」「歌」といった楽しみながら英語に親しめる活動などが抽出された。

表３　外国語活動に対する満足要因

カテゴリー	度数	百分率
ゲーム	484	53.8
歌	51	5.7
会話	46	5.1
発表,劇	28	3.1
リズム	20	2.2
単語，発音	18	2.0
友人との活動	16	1.8
ジェスチャーなど	15	1.7
その他	66	7.3

小学校ではゲーム等を通して楽しみながら英語に「慣れ親しん」でいたことがわかる。外国語活動の目標[1]に沿って活動が行われていた成果であろう。また「会話」や「友人との活動」のカテゴリーから分かるように，外国語を通して人と関わることの楽しさも感じている児童がいることが窺える。日本語とは異なるツールを使ってコミュニケーションをする楽しみを感じている生徒がいると考えられる。中学校でもこのような人との関わりを大切にした指導の継続が望まれる。

1.3 外国語活動に対する不満足の要因

不満足（楽しくなかった）を表明した180名（20％）の内，不満足の理由を記述した生徒数は148名で回答率は82.2％であった。表4に示されているように，カテゴリーの百分率は全体的に低い。上位の「理解困難」は，「英語で何が言われているのか，わからかなった。聞き取れなかった」「何をやっているのかわからなかった」などの記述が散見された。

外国語活動では習得や定着を主目標にしていないため，週１回では前回のことを覚えていない状況のまま新しいことが追加されて「分からない」と訴える児童がいると考えられる。『英語ノート』は教科書でなく，学校の実態に応じてアレンジして使うことを勧められているが『英語ノート』を教えさえすればよいとする風潮（金森，2012）からか，『英語ノート』をすべてやり終えなければいけないという義務感を感じている教員もいる。教員が焦って『英語ノート』をこなすことで児童の理解困難が引き起こされることも原因の一つと考えられる。

表４　外国語活動に対する不満足要因

カテゴリー	度数	百分率
理解困難	49	5.5
簡単すぎ（退屈）	22	2.4
興味のなさ	15	1.7
教師との相性の悪さ	10	1.1
その他	52	5.8

1.4 外国語活動に対する有用感

中学１年生に，昨年まで体験していた外国語活動は中学校で役立っていると感じているかを問う質問（APPENDIX）に対して，「５よくある」18%，「４かなりある」15%を合わせて33％，「時々ある」を含めると72％になる。一方「２あまりない」「１全くない」を合わせると28%となっている（図2)。表５から，満足度の数値の低かったＤ校がここでも平均値を下回っているが学校間差は満足度（1.1）ほど大きくはない（±0.38)。

約７割の中学生が外国語活動に対して有用感を感じているのは評価に値する。さらに，満足度と有用感の間に中程度の相関関係（r=0.51）を示していることから，満足度が高くなれば中学校での有用感はさらに高まることになるであろう。課題として，有用感を感じていない28%の生徒への対策を今後考えていかなければならない。

表５　有用感の記述統計

中学校	平均	標準偏差	平均との差
A	2.86	1.15	-0.27
B	3.26	1.13	0.13
C	3.33	1.22	0.20
D	2.75	1.17	-0.38
E	3.37	1.16	0.24
F	3.68	0.95	0.55
G	3.34	1.24	0.21
全校計	3.13	1.18	

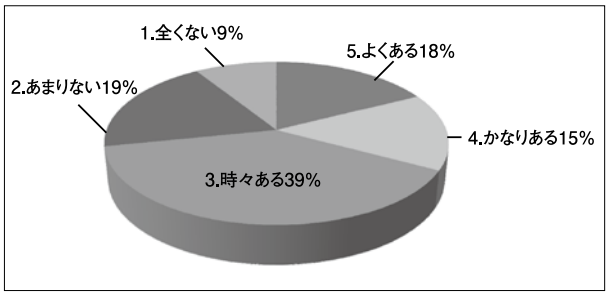

図２　外国語活動に対する有用感

1.5 外国語活動有用感の場面

中学校の授業において，外国語活動の有用感を感じる場面は，表６に示されているように，上位には「小学校で習った単語・表現を使うことができたとき」(51.1%)，「小学校で習った会話を中学校でいかせたとき」(41.8%)，「単語のつづりが読み書きできたとき」(36.6%) が挙げられている。

上位を占めている場面に共通しているのは外国語活動で慣れ親しんだ単語や表現，会話などが中学校の教科書で再び異なる場面設定で出会う場合や音の塊で覚えていた文章が，文字を見ることでいくつかの単語から構成されていることに気づいたりした場合のようである。またイ，オは単語の記憶に関連している項目である。外国語活動では単語などを覚え込ませることを目標にしていないので，たまたま覚えていた単語や表現が役に立ったと感じているようである。今後小中連携を考えていく場合，このような定着面をどのように扱っていくのか大きな課題である。ウ，キは人との会話が成り立った経験で英語による意思の疎通ができたときに役に立ったと感じている。よって外国語活動でもそのような意思の疎通ができた体験を多く持つせることが今後ますます大切になってくる。

表６　外国語活動有用感の場面

中学校で有用感を感じる場面	度数	百分率
ア．小学校で歌った歌や活動があるとき	247	27.5
イ．小学校で習った単語・表現を使うことができたとき	459	51.1
ウ．ALTや先生の英語が聞き取れたとき	227	25.3
エ．小学校で習った会話を中学校でいかせたとき	376	41.8
オ．単語のつづりが読み書きできたとき	329	36.6
カ．ALTの先生と英語で話ができたとき	76	8.5
キ．友達や英語の先生と英語で話ができたとき	211	23.5
ク．テストで良い点がとれたとき	233	25.9

1.6 外国語活動への要望

「外国語活動への要望」を記述した生徒数は644名で全体の71.6%であった。「書くこと」「単語」「会話」「ゲーム」のカテゴリーが上位を占めている。

表７　外国語活動への要望

カテゴリー	度数	百分率
1 書くこと	276	30.7
2 単語	209	23.2
3 会話	50	5.6
4 ゲーム	41	4.6
5 発音	17	1.4
6 中学校の予習	13	1.9
7 テスト	8	0.9
8 回数増加	7	0.4
9 歌	4	0.8
その他	64	7.1

*複数回答有（回答者総数644人）

「書くこと」「単語」の指導を望んでいる理由は二通り考えられる。一つは後述の2.4「中学英語学習の困難さ」の上位を「書くこと」「単語」のカテゴリーが占めていることから，中学校で困難を感じているために小学校からの指導を望んでいると考えられる。もう一つの解釈は後述の2.2「満足要因」で「書くこと」がトップに位置していることから書くことの楽しさを小学校から体験したいという要望と捉えることもできる。

「会話」「ゲーム」は,「もっと英語を話す機会がほしかった」という要望であると解釈できる。週１回では十分に話す機会が保障されていないことの表れであろう。

1.7 外国語活動の困難さ

外国語活動に対する不安や戸惑いを記述した生徒数は501名で55.7%である。表８に示されているとおり，上位を占めているカテゴリーは「単語」「発音」「聞き取り困難」「発表」「書くこと」「文字」である。

自由記述によれば,単語について「発音」「つづり」「文字」がわからないことに不安を感じている生徒が多い。外国語活動の目標は「慣れ親しむ」ことが目標で習得を狙っていないことを教員側が理解していても，生徒にとってはわからないことやできないことは不安に感じるのは自然なことである。また「聞くこと」に困難を感じているのはほとんど英語で進められて理解確認の場が不十分であることが原因の一つではないかと考えられる。

表８　外国語活動の困難さ

カテゴリー	度数	百分率
1 単語	98	10.9
2 発音	96	10.7
3 聞くこと	96	10.7
4 発表	47	5.2
5 書くこと	23	2.6
7 文字	10	1.1
8 覚えること	8	0.9
その他	110	12.2

複数回答有（回答者総数501人）

2.1 中学英語授業に対する満足度（楽しさ）

図３から分かるように，「５大変楽しい」「４楽しい」を合わせて63.2%，「３ときどき」を加えて84.7%の生徒が授業に満足している。表９から，学校間差は平均との差が±0.34で低い。

満足度について，外国語活動の満足度（80%）より高い数値を示していることから，全体的に中学校の指導がスムーズに実施されていると考えられる。学校間の差については±0.35に収まっているので大きな差はない（表10)。外国語活動の満足度では学校によって大きな差(±0.71）が存在していたが中学校で差が縮小された。６月の時点では中学校の指導によって，小学校の満足度を維持していると考えられる。

表９　中学英語授業満足度の記述統計

中学校	平均	標準偏差	平均との差
A	3.56	1.11	-0.12
B	3.80	0.95	0.12
C	3.62	1.08	-0.06
D	3.60	1.01	-0.08
E	3.82	1.06	0.14
F	4.02	1.01	0.34
G	3.92	1.01	0.24
全校計	3.68	1.05	

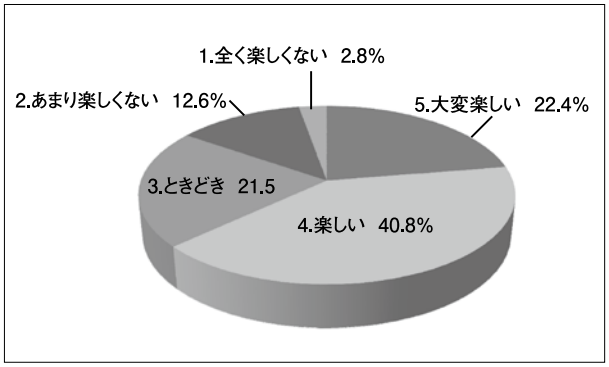

図３　中学英語授業に対する満足度

表10　中学校で満足に変容した要因

カテゴリー	度数
楽しい授業，ゲーム	39
書くこと	22
単語	16
話せる	11
分かる	11
先生	11
覚える	11
その他	9

一方，「２あまり楽しくない」「１全く楽しくない」をあわせて15.4%の生徒が不満足を表明している。前述1.1における「外国語活動に対する不満足」の20%と比べて，減少しているのは意外であった。仮に外国語活動で不満足を表明していても中学校の指導次第で克服できることを示した例である。

さらに外国語活動で不満足（２，１選択）を表明していた生徒のみを抽出して中学校英語授業についての満足度の変容を調べたところ，５，４，３を選択している生徒が65%いることが分かった。65%中の満足の主な理由を調べた結果（表10)，「授業やゲームが楽しい，おもしろい」「書くのが楽しい」「単語を書くことができた，覚えることができた」などが上位を占めた。ここから分かることは授業そのものが楽しく進められていることで満足度がより高まったということであろう。また「書くこと」は初めての新鮮な体験であるため楽しんで取り組んでいることが原因であると考えられる。単語についても同じ理由からであると推測できる。

2.2 中学校英語授業に対する満足要因

満足（5, 4, 3選択）を表明した生徒数760人中，理由を記述した生徒数は716名であった（94.2%)。表11に示されているように，上位に「書くこと」「ゲーム」「理解できること」「話すこと」「新たな発見」「読むこと」のカテゴリーが占めている。「新たな発見」は「新しい単語の言い方や意味がわかったとき」「知らなかったことを知って日常でも使える」など小学校時代に出会っていない単語，表現，文法を学べることの喜びを表すカテゴリーである。

表11　中学校英語授業に対する満足要因

カテゴリー	度数	百分率
書くこと	114	12.8
ゲーム	108	12.1
理解できること	95	10.7
話すこと	90	10.1
新たな発見	65	7.3
読むこと	48	5.4
先生の面白さ	42	4.7
友達との会話	41	4.6
詳しく教えてくれる	14	1.6
ＡＬＴとの触れ合い	9	1.0
その他	68	7.6

上位を占める「書くこと」「話すこと」「話すこと」「理解できること」から新学習指導要領で強調されている「４技能がバランスよく指導されていること」[2]が窺える。特に，「書ける」「読める」が上位にきているのは小学校でほとんど体験していない新鮮な活動に興味関心を示し意欲的に取り組んでいることが原因であろう。

また外国語活動の満足要因でも上位に位置していた「ゲーム」「会話」が中学校でも継続されているようである。さらに，「理解できること」「新たな発見」から，文

字を通しての新たな理解と発見に満足（楽しみ）を感じていると考えられる。「話すこと」「友達との会話」を同類のカテゴリーとして統合した場合に，度数が132になり，満足要因のトップになる。これは外国語活動で培った「伝えようとする意欲」（三浦，2012）が引き継がれていると考えることもできる。

2.3 中学校英語授業に対する不満足要因

不満足を表明した生徒138人中，理由を記述した生徒数は118名(85.5%)であった。表12に示されているように，「理解困難」「楽しいことがない」「書くこと」「覚えることができない」のカテゴリーが上位を占めている。

表12　中学校英語授業に対する不満足要因

カテゴリー	度数	百分率
理解困難	49	5.5
楽しいことがない（退屈）	15	1.7
書くことが多い	12	1.3
覚えにくい	9	1.0
読めない	7	0.8
教師との相性の悪さ	4	0.4
進度が速い	3	0.3
その他	17	1.9

どのカテゴリーも中学校の英語で問題となって挙がってくる項目であるが数値はまだ低いので深刻な問題ではないと考えられる。もちろん今後この数値が増えないように理解を助ける工夫が必要となる。4時間をどのように有効に活用していくか今後検討が必要であろう。「楽しいことがない」(1.7%)は小学校のゲーム中心の授業の影響で心配されているが，現時点ではそれほど深刻ではないようである。書くことへの抵抗感（三浦，2012）も指摘されるがこの時点では，特に問題はないと考えられる。

2.4 中学英語学習の困難さ

中学校の英語学習に対して困っているや戸惑っていることについて自由記述で回答を求めたところ，623人(69.3%)から回答が得られた。頻度順位が上位のカテゴリーには「単語」「書けない」「覚えられない」「読めない」などがある。

今年度から学習指導要領の改訂に伴って指導する語数が900語から1200語に増加したこともあって，単語の多さ，単語を書くこと，単語を覚えることに困難を感じているようである。

2.2の満足要因には「書くこと」がトップにきていたが，苦手意識をもっている生徒にとっては書くことに困難を感じはじめているようである。

表13　中学英語学習の困難さ

カテゴリー	度数	百分率
単語	235	26.1
書くこと	114	12.7
覚えること	94	10.4
読むこと	59	6.6
文法	49	5.4
聞くこと	40	4.4
発音	39	4.3
早い進度	20	2.2
発表・会話	18	2.0
その他	93	10.3

（複数回答有）

2.5 中学英語教科書内容の理解度

表14，図4が示しているように，全体の平均値は3.85で，学校ごとの平均値との差は ±0.25に収まっているので学校間差は小さいと判断できる。教科書の内容の理解度「5．約100～80%」を選択した生徒が34%，「4．約79～60%」は36%，二つ合わせて70%になっている。「2 約39～20%」を選択した生徒は10%,「約19～0%」は5％で両方合わせて15%であった。

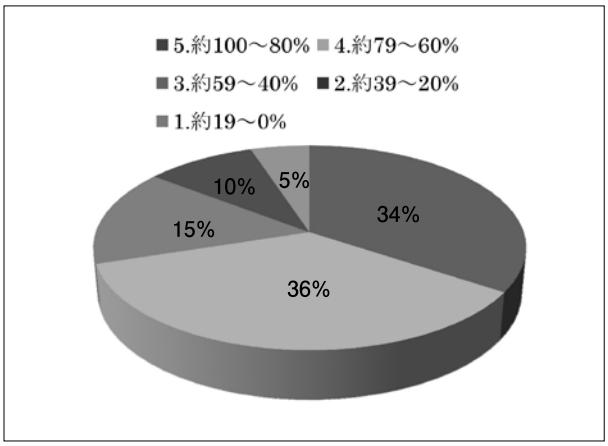

図4　中学校英語教科書の理解度

教科書内容の理解度70%は概ね良好な数値であると考えられる。2.1の「中学英語授業に対する満足度」と「教科書内容の理解度」間の相関関係を確認したところ，相関係数0.53で中程度の相関を示した。授業への興味関心と授業の理解度が関連していると考えられる。小学校での外国語への興味関心を知的なレベルへと引き継いでいくことが望まれている。

表14　中学校英語教科書の理解度記述統計

中学校	平均	標準偏差	平均との差
A	3.60	1.26	-0.25
B	4.06	1.02	0.21
C	4.02	1.04	0.17
D	3.65	1.20	-0.20
E	3.93	1.18	0.08
F	3.89	0.98	0.04
G	4.00	1.21	0.15
全校計	3.85	1.15	

3　まとめと教育的示唆

最後に，本研究から得た知見をまとめて今後の外国語活動と中学校英語指導への示唆を述べたい。

２年間の外国語活動に対して中学１年生は，学校間差は若干あるものの，概ね満足しているようである。ゲームや場面設定された会話に楽しく取り組んでいる（1.1外国語活動の満足度，1.2外国語活動に対する満足要因）。しかし聞くことに困難を感じている生徒や，幼稚な内容のために意欲が湧かないと不満を表明する生徒もいる（1.3外国語活動に対する不満足要因）。外国語活動では，主に音声で意味を理解しているので視聴覚教材など他の手だても十分活用して指導することが重要である。内容については小学５，６年生の発達段階に適した教材の開発や『Hi, friends!』の効果的な活用方法の工夫が今後望まれる。

約７割の中学１年生が２年間の外国語活動の経験が中学校英語学習に役立っていると感じている。特に，外国語活動で扱った単語や表現に出会ったり使ったりする場面がある場合である（1.4外国語活動に対する有用感，1.5外国語活動有用感場面）。今後，スキル面での有用感だけでなく，小学校で培ってきたコミュニケーションを通しての豊かな人間関係づくりの面で有用感が一層高まるような連携が望まれる。

約１割の生徒が「単語」「発音」「聞くこと」に困難さを感じている（1.7外国語活動の困難さ）。外国語活動の目標の「慣れ親しむ」だけでは十分でなく，不安を感じたり，戸惑ったりしている表れであろう。外国語活動では単語の定着や発音の正確さは強調されていないが，生徒は単語の定着や，発音の正確さを求めている傾向にある。しかし，現状のように週1回の実施や指導者が専門の英語教師でないことの現状を考慮すれば，定着やスキルを重視した指導への転換には慎重を期する必要がある。

中学校で重要なことは，小学校で苦手意識を持ってしまった生徒へ再チャレンジの機会を与えること（金森，2012）ができるように十分な配慮がすることである。再度音声に馴染ませ，文字を利用して定着を図ることが望まれる。

約85%の中学１年生が中学の授業に対して肯定的に評価している。また英語学習への満足度や教科書内容の理解度において学校間差が縮小している（2.1中学英語授業に対する満足度）。各小学校で実施されてきた外国語活動の実態，成果，課題を十分に理解して中学校で指導を行えば，外国語活動で培った生徒のコミュニケーションに取り組む意欲や態度を継続しつつ，小学校間の指導のばらつきを解消できると考えられる。

中学１年生は書くことについて２つの捉え方をしていると考えられる。一つは書くことに苦手意識を持ち始めているグループ，もう一つは，書くことを初めての新鮮な体験と捉え，新たな技能に取り組む充実感や自分の思いを書くことで伝えることができた達成感を得て，意欲的に取り組んでいるグループである（2.2中学校英語授業に対する満足要因，2.3中学校英語授業に対する満足要因，2.4中学英語学習の困難さ）。中学校では書くことへの難しさを十分配慮しつつも「書くこと」や「読むこと」への期待や意欲を活かした指導が望まれる。意欲的な態度を継続させていくには，英単語を単に10回書き写すなどの機械的な練習だけでなく，自分の書いたものを読んでもらえる読み手を意識した指導の工夫が欠かせないであろう。あるいは書いたものを基に簡単なスピーチを作成させ，スピーチ内容を班あるいはクラス全体に伝えるという明確な目標をもったライティング指導が望まれる。

最後に，外国語活動で培ったものとは，英語を通して人と関わることの大切さや喜び，音声を通しての理解や伝達，音声のみで理解してきた耳の慣れ，音声と表情などのみで自分の意図を伝えた経験であろう。これらを無駄にすることなく，それらの経験を中学校で認め，その体験をもとに中学校では文字を徐々に導入して，外国語活動で培ったものを一層伸ばしていくことが何よりも大切なこととなる。そのことが中学校の英語苦手生徒の減少に寄与するものと考えられる。

注

1　外国語活動の目標は「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」である。

2　新学習指導要領では，４技能を総合的に育成する指導を重視する（４技能をバランスよく指導する）ことを強調している。

引用文献

大城賢，横山純子（2008）「小学校英語が中学校英語へ与える影響と効果」『Jr. STEP NEWS』５月号，財団法人日本英語検定協会

金森強（2012）「小学校外国語活動に求められるものは何か」『英語教育』大修館，Vol.60 No.11

小泉仁（2011）「小学校で英語を学習することで何が変わるか」『英語教育』大修館，Vol.59 No.11
Benesse 教育研究開発センター（2011）「小・中学校の英語教育に関する調査―中学１年生の目から見た英語教育とは―」http://benesse.jp/berd/center/open/report/syochu_eigo/2011/soku/pdf/soku_all.pdf
三浦孝（2012）「小学校英語活動導入を踏まえた中学校英語授業のあり方」『静岡大学教育学部研究報告』（教科教育学編）第 43 号，25-40.
文部科学省（2008）『中学校指導要領解説 外国語編』
文部科学省（2009）『英語ノート１』
文部科学省（2009）『英語ノート２』
文部科学省（2012）『Hi, friends! １』
文部科学省（2012）『Hi, friends! ２』

（2012年８月31日受付）
（2012年10月17日受理）

APPENDIX

１年　組　　番　名前

出身小学校名：(　　)

１．小学校の英語活動の授業は楽しかったですか。次の番号を〇で囲んでください。

5	4	3	2	1
大変楽しかった	楽しかった	ときどき	あまり楽しくなかった	全く楽しくなかった

２．１の質問について、**５、４、３を選んだ人はどんなことが楽しかった**ですか。**１、２を選んだ人はその理由**を書いてください。

３．中学校で英語を勉強していて**「小学校で英語をやっておいてよかった」**と思うことがありますか。

5	4	3	2	1
よくある	かなりある	時々ある	あまりない	全くない

４．中学校で英語を勉強していて**「小学校で英語をやっておいてよかった」と思うときはどんなとき**ですか。次のものであてはまるものを**すべて**選び、ア～ケに〇をつけてください。

ア　小学校で歌った歌や活動がおこなわれたとき　　イ　小学校で習った単語・表現を使うことができたとき
ウ　ALT や英語の先生の英語が聞き取れたとき　エ　小学校で習った会話を中学校でいかせたとき
オ　単語のつづりが読めたり書けたりしたとき　カ　ALT の先生と英語で話ができたとき
キ　友達や英語の先生と英語で話ができたとき　ク　テストでよい点が取れたとき
ケ　その他（　　）

５．小学校英語活動で**もっとやってほしかった**ことや**学びたかった**ことは何ですか。

６．小学校英語活動で、**困った**ことや**むずかしいと感じていた**ことは何ですか。

７．中学校の英語の授業は楽しいですか？番号を〇で囲んでください。

5	4	3	2	1
大変楽しい	楽しい	ときどき	あまり楽しくない	全く楽しくない

８．７の質問について、**５、４、３を選んだ人はどんなことが楽しい**ですか。**１、２を選んだ人はその理由**を書いてください。

９．中学校での英語の勉強が始まって**困った**ことや**とまどったこと**は何ですか?

10.　英語の教科書の内容をどの程度理解できていますか。**番号**を〇で囲んでください。

5	4	3	2	1
約 100~80%	約 79~60%	約 59~40%	約 39~20%	約 19~0%